

## 復刻に際して

■明治三十年代に刊行された『旧幕府』は、幕末維新史研究に不可欠の史料であるにもかかわらず、永年にわたって入手困難でした。このたび小社ではその雑誌全四十八冊を全五巻の上製箱入本にまとめて復刻致します。

■内容につきましては、諸先生方がこのパンフに書いておられる通りです。本誌は幕末維新の乱世を生き抜いてきた関係者が老齢を迎える頃、彼らの直接参加を得て編纂された、全編これ生の史料の大集成。時と共にその価値を増していく貴重史料です。

■本誌の欠点は、目次に頁数がついていないことでした。本誌は昭和四十六年、臨川書店と原書房によって同時に復刻されましたが、どちらもその修正をしていません。今回の復刻に際して小社では、全五巻の各頁に通し番号（ノンブル）を付すと共に、それに基づく「総目次」を作成し、「主要執筆者紹介」と合わせて別冊にしました。

■その他、本書への理解を深めて頂くため各巻末に次のような新論文を収録致します。

- ①『旧幕府』の時代的背景  
北海道大学名誉教授 田中 彰
- ②『旧幕府』私の使い方  
作家 中村彰彦
- ③『旧幕府』とその時代  
評論家 紀田順一郎
- ④幕臣出身の二人の山口県令  
静岡大学名誉教授 田村貞雄
- ⑤雑誌『旧幕府』に集った人びと 国立歴史民俗博物館助教授 樋口雄彦
- ⑥主要執筆者紹介

■数え切れないほど多くの人々による原稿・史料・談話・口絵等で構成された本誌の全貌を、このパンフでお伝えできなくて残念ですが、「本を直接手にとって見た上で」買うことのできる、小社ならではの下記のような返本制度もございます。

▼「釣り人の眼前に広がる魚影豊かな海」  
を思わせる稀有の史料集が、この三十年間どこからも再復刻されないのに驚きながら、ここに予約募集のパンフをお届け致します。

（※中村彰彦「旧幕府」私の使い方より）

▼本書は「現品到着後三日以内返本OK」です。（返送料は予約者負担）今回とくにこれを強調するのは「羊頭狗肉」をおそれ「本は直接手にとって買う」の大原則を生かしたためです。予約特価が特に安いのは、古くからの大切なお得意様に焦点を当ててのことです。

▼高額書が続くため、刊行は来年一月です。分割払いには利子、手数料など不要なので、入手困難にならないうちに、ぜひお求め下さい。

▼今回は予約募集終了後に印刷を開始します。「締切前の売切れ」が無い代わりに、もし予約が三百を超えた場合、刷り部数を増やすこととなりますのでご了承下さい。店主敬白

■体 裁 A5判クロス装製上製箱入

全五巻 計四千五百頁

（別冊二）

■定 価 七万円（消費税込・送料千円）

■予約特価 五万円

■予約締切 平成十四年十月末日

■発 売 平成十五年一月中旬

限定三百部復刻（番号入）

▼五回まで分割払いOK ▼書店には卸しません

徳山市銀座2-13

☎〇八三四-二九五

マツノ書店

URL <http://www.yingurban.jp/home/matuno/>

長州維新史を補完  
幕末史料の森

# 舊幕府

全五巻

（別冊二）

マツノ書店



# テーマ別収録記事一覧(抄)

六五〇を超える項目の中から選んでみました

## 口絵

- 徳川家康肖像
- 小笠原長行肖像
- 徳川家光和歌親筆
- 松平容保写真
- 板倉勝静写真
- 永井尚志写真
- 箱館戦争海戦図
- 白虎隊自害の図
- 幕府軍艦開陽丸
- オランダ留学生
- 徳川家達写真
- 岩瀬忠震画
- 徳川慶喜写真
- 大鳥圭介写真
- 徳川家茂親筆
- 松平春嶽写真
- ベリ―浦賀上陸図
- 向山黄村写真
- 木村芥舟写真
- 回天艦品川沖で薩摩艦を砲撃の図
- 太平洋上咸臨丸の図
- 田辺太一写真
- 栗本鋤雲写真
- 箱館戦争松前城砲撃の図
- 榎本武揚写真
- 山内容堂詩
- 徳川斉昭書
- 大塩平八郎手翰
- 勝海舟写真
- 高島秋帆自画賛
- 佐久間信久写真
- 林忠崇写真
- 会津日新館の図
- 高橋泥舟写真
- 松平太郎写真
- 林述斎肖像
- 遣米使節一行
- 江川坦庵肖像

パリの徳川昭武一行  
長野主膳夫婦和歌  
函館碧血碑

## 伝記・自伝・人物履歴

- 小笠原明山公御事蹟
- 幕府名士小伝
- 中浜万次郎伝
- 大久保一翁伝
- 文明公国事勤勞明細書
- 板倉伊賀守伝
- 永井玄蕃頭伝
- 関口隆吉伝
- 勝伯略伝
- 高島四郎大夫伝
- 三河屋幸三郎の伝
- 昭徳公御記(家茂公伝)
- 松平春嶽公履歴略
- 文恭公御実記
- 栗本鋤雲翁の自伝
- 蕃山熊沢了介先生記事
- 松岡盤吉君小伝
- 沢太郎左衛門氏の略歴
- 和宮御逸事
- 広沢安任翁小伝
- 甲賀源吾君の略伝
- 雲井龍雄伝
- 川路左衛門尉聖謨小伝
- 会津藩老神保修理の事
- 堀内蔵頭小伝
- 安藤家十代対馬守信正履歴
- 林昌之助忠崇伝
- 坦庵江川太郎左衛門先生の伝
- 夢酔独言
- 長野主膳略歴記事
- 鈴木春山翁略伝
- 島津斉彬公之事
- 水野越前守年譜
- 小栗上野介
- 故浅野美作守履歴

水野忠精年譜  
棲碧妻木先生の伝  
伝通院殿御事歴梗概草稿  
江川家の忠臣望月鴻助  
近藤勇の伝  
矢部駿河守

## 幕末の政局

- 盤錯秘談抄
- 磁硯山房日録
- 村田氏寿翁の談話
- 徒然叢書
- 逸事史補
- 和宮様御東下日記
- 長州征伐日記
- 大政奉還始末
- 慶応日記抜抄
- 御進発御供日誌
- 秘東訳文
- 新伊勢物語
- 徳川十四代將軍御相統

## 外交

- 米国より贈品並角力の図解
- 文久三年癸亥二月十九日英国軍艦より差出候書翰之大意
- 田中廉太郎氏の書翰
- 開国の曙
- 日本最初の米国留学生
- 三十九年前桑港新聞咸臨丸の記事
- 航西小記
- 荷蘭帆船史料「スベルウエル」号難破始末誌
- 下田港御用日記
- 松平石見守露国と權太二分の約を定めたる始末
- 故村垣淡州遣米使日記を読む
- 幕府派遣の大使米国にて歓迎せらる(米国新聞抄訳)
- 西暦一八六〇年日本漫遊の米国エイチビービー氏の書翰訳
- 日本に於て西洋式火薬製造機械創立之記

## 写真事歴

- 日新館
- 講武所規則覚書
- 講武所稽古日記
- 幕府の陸軍刑法
- 醫師拜領物天文方御用被仰付御目見被仰付

## 世相・民情

- 幕末に於ける諷刺的童謡
- 諸国産物集
- 諷刺画
- 連俳の諷刺
- 乍恐売弘めのため口上
- 知世保具永婦志
- 今様流行物語
- 当世いろはたん歌
- 童謡一束
- 時務策チヨホクレ
- 錦旗勅命丸と江戸の水
- 前代未聞阿房鏡独道行
- 開席料理三者論
- 漫録

## 戊辰戦争

- 戊辰之夢
- 南柯紀行
- 彰義隊発起顛末
- 上野戦争碑記
- 函館始末
- 彰義隊戦争実歴鈔
- 函館脱走海陸軍惣人名
- 伏見戦争前後の記事
- 岡崎脱藩士戊辰戦争記略
- 旧上山藩江戸鹿兒島藩邸浪士討伐始末
- 結城藩戊辰始末
- 二ツの宝船
- 上野戦争実記
- 宇都宮迎戦争記
- 伏見戦争前後之記事
- 函館戦史
- 薩邸砲撃の方略
- 中島君招魂碑文を読む
- 回天丸

## 江戸時代

- 出陣日記
- 大鳥圭介獄中日誌
- 国難私記
- 伏見戦争の一斑
- 幕末事況武士ノ名残
- 榎本船将品川抜鉞之辞
- 輪王寺宮警城路御落去之次第日記書抜
- 会津の藩風
- 將軍家の朝夕
- 大奥の服装
- 大奥の朝夕
- 旗本風俗
- 大奥の五節句
- 旗本国字分名集
- 日光東照廟造営簿
- 武家諸法度
- 年中衣服略記
- 柳営事略
- 幕府大奥役名扶持并乗物一覽
- 徳川家八朔祝賀の起因
- 御徒士物語
- 執政水野越前守改革(町触の写)
- 辻番心得
- 御蔭参記事之手簡
- 咬菜秘記
- 下総国小金中野牧江御鹿狩一件書留
- 旧幕時代年中行事
- 御舟記
- 御広間伝達帳写
- 日光御宮
- 御軍役人数積
- 鑄馬秘叢
- 御治世以後御加増所替
- 大久保家記
- 東照宮略記
- 日光山沿革大意
- 日光山略史
- 府城沿革
- 姫山君言行録
- 日光山堂社記鈔録
- 御朱印写
- 旧彦根藩旧記抜抄
- 家綱公御誕生に付宸筆の勅書御頂戴后宮御方まで御請

## 史談会での談話者

- 沢簡徳 丸毛利恒 本多晋
- 尾高惇忠 江川英武 田辺太一
- 長岡護美 下岡蓮杖 松平太郎 清水卯三郎 伊庭想太郎 荒井鎌吉 大沢基輔
- 飯島半十郎 永田正吉 江原素六 杉亨二 重野安釋 村田直景 武田信賢 山口拳直
- 木村芥舟 向井秋村 外崎覚井上正直 柴太一郎 梶金八
- 関伝吾 荒井郁之助 町野五八 野本次郎

## 漢詩・漢文・和歌・俳句等の掲載者

- 木村芥舟 栗本鋤雲 向山黄村 杉浦梅譚 中島三郎助
- 勝海舟 榎本武揚 田辺太一
- 広沢安任 徳川斉昭 川路聖謨 鳥居耀蔵 成島司直 山口泉処 小笠原長行 新見正興 高橋泥舟 平山省齋 本多晋 水野忠邦 松平春嶽 木城花野 戸川安清 水野忠央

今回新しく作成した「執筆者紹介」は六三名に及び「復刻版」をより使い易くしています。

# 『旧幕府』主要執筆者紹介

執筆者以外に、談話者・筆記者・資料寄送者や没後に遺稿を掲載された者も含む

樋口雄彦

## 阿部弘蔵

旧名二郎・杖策。槐陰と号す。緒方洪庵や武田成章に蘭学を学び、幕府の砲兵差図役並等をつとめた。彰義隊の結成に参加、隊名を発議した。文部省に奉職したほか、『修身説話』(1887年)・『寛永寺建碑始末』(1912年刊)などの著作があることが知られる。

## 荒井郁之助 (1836~1909)

幕臣荒井清兵衛頭道の子。昌平黌・軍艦操練所で学んだ後、軍艦操練所教授に就任、幕府海軍の育成にあたる。戊辰戦争では榎本武揚らとともに脱走、蝦夷地政権では海軍奉行になった。敗戦後投獄されたが、釈放後には開拓使や内務省地理局に奉職、初代の中央気象台長になるなど、天文・測地・気象等の分野で貢献した。

## 安生順四郎 (1847~1928)

下野国上都賀郡久野村(粟野町)の名主の子。勝海舟と親交があり、霞舟と号す。戸長・勸業委員・郡長などを歴任し、栃木県会議長に選ばれた。県下最初の牧牛場を開くなど産業振興に貢献したほか、1879年保見会を設立しその副会長となり、日光の自然・文化財の保存に尽力した。旧幕府史談会会員。

## 安藤太郎 (1846~1924)

鳥羽藩医安藤文沢の子。坪井芳洲・箕作秋坪に蘭学を学び、幕府の軍艦操練所に入る。榎本武揚の脱走艦隊に身を投じ箱館戦争に参加。外務省に奉職、岩倉使節団にも加わり、上海やハワイの総領事等を歴任した。クリスチャンでもあり、禁酒運動に尽力した。妻は荒井郁之助の妹。旧幕府史談会会員。

## 飯島半十郎 (1841~1901)

虚心と号す。御広敷番頭などをつとめた幕臣飯島善蔵の子。幕末には騎兵差図役をつとめ、遊撃隊士として箱館戦争にも参加した。文部省編輯局で教科書編纂に従事し、1875年大槻磐溪らと洋々社を結成、雑誌『洋々社談』の編輯人となった。浮世絵研究の先駆者として知られ、『葛飾北斎伝』『浮世絵師歌川列



## 順逆史観を超えて

中村彰彦

幕府ということばは、今も昔もよく知られている。しかし、旧幕府と「旧」を冠すると耳遠く感じる人もあるのかと思われるので、このような単語が生まれた背景に触れることから始めよう。

周知のように江戸幕府は、慶応三年（一八六七）十月十四日、徳川十五代将軍慶喜が朝廷に大政奉還の上表を提出、十五日に勅許の沙汰書を受けたことにより幕を下ろした。この時点から幕府は、旧幕府と呼ばれる過去の政権となったのである。

慶応四年一月三日に勃発した鳥羽伏見の戦いが、「旧幕府軍対薩長軍の激突」と要約されるのもそのためであり、同年四月十一日の江戸無血開城当日、江戸から北関東へ散って薩長軍主体の新政府軍と再度雌雄を決することを夢見た約二千五百人の旗本御家人たちが「旧幕府脱走軍」と総称されるのもおなじ理由からである。

また旧幕府ということばは旧幕と縮めた形で用いられることもあり、旧幕御家人などという表現もおこなわれた。

ところで明治という名の新時代は、日本人のすべてが文明開花の世を謳歌した時代ではない。明治政府の顯官となった榎本武揚ら例外的な存在を除いて考えるなら、旧幕府関係者、ないし奥羽越列藩同盟に与した諸藩の出身者たちにとっては逆風吹きすさぶ時代にほかならなかった。

薩摩藩出身の重野安繹、佐賀藩出身の久米邦武らが作り、国史アカデミズムの脊柱として据えられた官製史観は、順逆史観であった。これは戊辰戦争を正義の軍隊が逆賊を討った戦いと規定するものだったから、右のグループに属した人々は賊徒、朝敵といったレッテルを貼られ、いわれなき屈辱を味わう後半生を送らねばならなかったのである。

だが順逆史観は、今日の視点から見ればもはや過去の遺物でしかない。

なによりもこのように皮相的に過ぎる見解は、大和朝廷かまつろわぬ民か、源氏か平家か、南朝か北朝か、といったあまりに単純な二元論的歴史観を一步も出るところがなかった。しかもしやにむに江戸幕府の歴史的意義を否定することのみを主眼としたこの歴史観のもとでは、江戸幕藩体制下においてようやく五街道や物資の流通ルートが確定されたこと、武家文化と都市文化の両者が花開いたことなどを正しく評価できるわけもなかった。

こう書いてくれば、あらかたお察しただけなことと思う。本書『旧幕府』はいみじくもその書名が示すように、旧幕府関係者たちが集まって幕末における幕府の実情、戊辰戦争前後の旧幕府側要人たちの言動などをありていに活字化し、もって江戸時代再評価の気運を高からしめた論集なのである。

内容も戦記あり、史伝あり、秘話あり、日記ありとまことに多彩で、順逆史観などを超えて真の幕末維新史を学ぼうとする者には絶好の史料集となっている。

とはいえ、右のように要約しただけでは、まだ『旧幕府』の全貌を語ったことにはならない。

本書には、幕府の招きで来日したフランス軍事顧問団のひとりジュール・ブリユネが薩摩藩邸焼き打ちをどのように指導したかを物語る史料も収録されている。夫を旧幕府脱走軍の一員として送り出したあと、不安にかられて書かれた妻の手紙もある。

かと思えば幕末の世相を皮肉った歌や風刺画も掲載されており、夷人（異人）は「人畜の間」……人間と獣の中間的存在に過ぎないとする奇怪な認識があったことに触れる一文もある。

神は細部に宿りたもう。

『旧幕府』は長短、硬軟さまざまな文章を紹介することにより、まことに多面的であった幕末の諸相を後世に伝える貴重な証言録でもあるのだ。

個人的なことをいえば、私は『旧幕府』をこの二十年近く愛読し、創作活動にも大いに役立ててきた。近頃は入手不可能な状況がつづいていたためか、その存在を知らない同業者がいやに目につくようになってきたのを淋しく感じていたところなので、このたびの復刻を大変うれしく思っている。

もって本書を、幕末維新史の森に踏みこもうとするみなさんにお薦めするゆえんである。





次に、『旧幕府』には、戊辰戦争を戦った旧幕臣の原稿、談話・史料等が極めて多い点に着目したい。主立ったところでは、鳥羽・伏見戦争は沢太郎左衛門・岡崎撫松ら、上野戦争は本多晋・丸毛利恒・阿部弘蔵ら、箱館戦争は大鳥圭介・安藤太郎らがそれぞれ史料を提供している。もちろん、他にも、長州征伐、薩摩藩邸の焼き討ち、甲陽鎮撫隊の戦い、房総での撤兵隊の戦争、遊撃隊の箱根戦争、美加保丸の難船など、戦争関連の記事は非常に目に付く。

先述の旧幕府史談会員九十二名のうち十九名は、戊辰時に官軍と抗戦したか、脱走し抗戦しようとした経験を持つ旧幕臣・藩士であった。何と言っても雑誌刊行の支援者の中には榎本・大鳥の二人の重鎮がいたし、戸川残花自身が年少の身でありながら彰義隊に加わった経験を持っていた。朝敵・賊軍とされたのは遠く三十年前、明治国家体制が確立する中でそれなりの地位に付き自信を取り戻した彼らは、自らの過去をようやく語り出したのである。『旧幕府』は、そんな元抗戦者たちが自らの来歴を振り返り、歴史に位置づけ直そうとする上で、格好な発表の場となったといえる。

第九号の告知欄には、次号からは「衰運の幕府のみならず、隆盛の幕府をも記載」したいと、幕末の記事だけでなく十一代將軍の時代にまでさかのぼり編集を行うとしているが、結局、その後も幕末関連の記事が誌面の多くを占めた。皮肉にも『旧幕府』は、今日では幕末の文献資料の豊富さで重宝されているわけであり、「衰運の幕府」時代に焦点を当てたからこそ後世にその史料的价值が高まったのである。その中でも戊辰戦争関係の記事は最も豊かな部分である。

(復刻版解説樋口雄彦「雑誌『旧幕府』に集った人びと」より)



## 『旧幕府』とその時代

紀田順一郎



「旧幕府」は明治の詩人・評論家戸川残花(一八五五～一九二四)の編纂により、明治三十年(一八九七)から約三年間にわたり刊行された旧幕臣の雑誌で、故老による回想や論考、文芸作品などを掲載し、一種の同人誌的な色彩を帯びているが、その後の幕末維新研究の先駆ともなった点で意義があり、今日資料誌としての声価が高い。

明治維新は歴史上最大の変革であったから、その渦中にあつた人々にもさまざまな命運をもたらした。とくに敗者としての旧幕臣、士族の場合には浮沈が激しく、新政府に出仕した者あれば、逆に反政府運動に身を投じた者あり、あるいは言論や文芸の道に活路を見出した者もあつて、その動向は一樣ではなかつた。(十四行中略 今回の復刻版には全文収録)

戸川残花が「旧幕府」を主宰した動機は、維新の故老がすでに頽齡に達した段階で、後世のために客観的資料を遺したいという願いからであるが、その裏面には旧幕人としての個々の感慨をいまのうちに記録しておこうという意図が伏在したことは疑いをいれない。当時までの逐次刊行物ないし分冊形態の資料誌としては「維新史料」(一八八七)、「開国史料」(一八八八)、「史談会速記録」(一八九二)、「名家談叢」(一八九五)、「同方会報告(同方会誌)」(一八九六)等があり、これに東陽堂のグラフ誌「風俗画報」(一八八九)や東京帝国大学史談会の「旧事諮問録」(一八九二)まで加えれば汗牛充棟、いわばブームの感を呈していたといえる。その中に伍して、文学者の戸川残花が「旧幕府」を主宰した意味はどこにあるのだろうか。

残花の六十九年の生涯を回顧して気がつくことは、前半の詩人としての経歴と、後半の歴史研究者・教育者としての経歴とはっきりと二分され、その分水嶺となるのが明治三十年(一八九七)の「旧幕府」創刊と

いう事実である(正確にはその前年に「徳川武士銘々伝」が上梓されているが)。「旧幕府」自体は約四年しか続かず、後継の「武士時代」(一九〇二)も約一年で終わったが、その後は幕末維新に関する著述に専念した。いろいろな事情があつたにせよ、後半生の彼がほとんど詩作を行っていないのは示唆的で、この雑誌の編纂も余技ではなかつたことを思わせる。

幕末維新回顧のブームの中で、あえて屋上屋を重ねることになりかねない雑誌を企画したのは、旧幕臣の思いを客観的記述に託して伝えたいということにあつたらう。そのために資料的記事ばかりでなく、「幕府軍艦開陽丸の終始」「大鳥圭介獄中日記」「彰義隊戦争実歴抄」のような維新における幕軍側の記録をはじめ、「氷川茶話」「中浜万次郎氏伝」のような歴史上の人物の回想や伝記に重点を置いている。さらに名士の「詞藻」や当時の落書等のコラムまでを配し、幕府時代の文化や世相を伝えるように編集されている。今日の私たちがから見ると、これらの誌面には旧幕人の生き方、思想、教養というものがにじみ出ているように思われるし、それこそが編集者の狙いであつたと思われる。

いわば「旧幕文化」という誌名がふさわしいような内容に、編者の当代への満たされない思いや屈折感が偲ばれる。明治もすでに三十年、旧幕臣としての思いを直截に口に出すことはデリケートな問題となつていた。残るところは回顧に託して心境を吐露する以外になかつた。

元來残花は懐旧の人である。「文学界」同人時代の「しのぶもじずりみだれつ、いもがしるしのおくつきに 名みだのつゆのひるまなし いまはむかしになりけり」(「岸辺の柳」というような情調の詩は数多い。これに加えて、同時代の「明智光秀」という論考の「光秀をして明治の世に生れしなば、渠が本能寺の一番は正当防禦と云ふも敢て過言に非ざる可し」といった順逆の思想が、あたかも楯円の二つの焦点のように結像したところに、雑誌「旧幕府」と、一連の旧幕派史論が生まれたといつてよい。

雑誌は個人の著作よりも一時代をトータルに表す。単なる資料的価値を超えた当代の空気まで伝えるところに、雑誌を通読する意味があることはいまでもない。このたびの復刻を機に、全ページを読み直したい。

内容見本特集

舊幕府



マツノ書店

若老濁清邪正危安衰盛沈浮	者老濁清邪正危安衰盛沈浮	奇談	庚申	無盡藏	行司	世界萬事皆一	有陰有陽	有天有地	勸進元	喜壽翁藏作	賣買
角遊行上人參府	遊行人參府	諸蕃の無心情	水老の無心情	小團次の中乗り	花川戸の萬惡	紀の國深山大樹	吹替の貳朱金	重花川戸の萬惡	輕小團次の中乗り	憂水老の無心情	歡諸蕃の無心情
巖長士の御吟味	義士の御吟味	多	少	貧	富	高	低	高	低	嘘	眞
使節の御歸り	アメリカ富士詣	御大老のお大名	紋付ぶつさき羽織	高名のお大名	地震後明地の假板屏	冥加金上納町人	卒乗の小僧	額銀停止の噂	額銀停止の噂	吳國錢の直下げ	吳國錢の直下げ
夢湯のころひ	夢湯のころひ	強	弱	公	私	長	短	興	廢	靜	喧
アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇	アメリカの關脇
來年御入興の御迎	來年御入興の御迎	朝	晚	上り	下り	張	弛	望	嫌	衰	榮
兩國開帳朝詣	兩國開帳朝詣	高野山の積金	浪鏡の拂底	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい	辻燒のさゝい
大川戸の往來	大川戸の往來	少蘭月琴の唐音	歌澤の端唄	雁鍋の草履札	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰	辻の葉子の折詰

この番付の解説が裏面に十七項もあり、掲載できず残念です

のなりき、百川翁が留守居役に出でし頃は既に長き弁をさす者はなかりしが、帯は長く後ろに垂下したり。

○席上の談話は決して公用を語るとなし、先づは芝居、角力などの話にして、當時は役人に學者も少なければ勿論藝文の事などはなし。

○遊廓へもをりくは行きしなり、吉原、品川などにて駕に乗り草履取りは一所に驅けて供せしものなりき、駕は四枚肩と稱し四人の壯漢がかつぎゆくなり。



(七六)

※パンフレットの印刷は濃緑ですが、復刻本はすべて黒です

○帝鑑の間席の大名には左の如き陋習はなかりしが、雁の間席の大名の留守居の新參は、遊廓に眠りし曉に先生が敵妓と眠る部屋にゆき恭しく御機嫌を窺ひしものなりとぞ、翁は初め此事あるを知らず一夕登樓せしに曉に至りて妓は翁の眼を攪まし、御機嫌窺ひに行き給ふやと問はれて、他席の留守居には驚く可き陋習あることを知りしとぞ。

○先生が新參に對する頗る傲慢無禮の事多し、或時翁は品川の或妓樓より例の先生の書翰あり(小田原藩の留守居松下甚左衛門)直ちに駕に乗りて行きしに、時間遅くなれりとして無禮の言を吐く、翁奮然として斬つて捨てんと長劍を提げて立つ、同勤の和解によりて事なかりしが其後は先生頗る百川翁を優對したりとぞ。

挿圖の床の前に坐するは先生にして、末席に麻上下を着するが新參なり、藝者三ツ指をつきて次の間に坐し、娘分も同様の姿にて共に列坐す威儀の堂々たるを見る可し呵！

### 簗下風俗其一 (三千石以上)

旗本と云へば八万騎、八万騎と云へば一切平等にして皆な殿様育ちと思ふ者もあり、或は又諸大名の士分位に思ひて軽く考ふる者もあり、一言に約すれば輕重ともに其正鵠を失なふこと多し、旗本には九千九百石の家もあり、百石或は百俵の人もあり、大名に劣らざる領地あるも旗本なれば、一僕さへも雇ひ難き程の旗本もあり、第一は三千石以上、第二は千石以上、第三は五百石以上、其他の小階級は役により家格により其差枚擧に暇あらず、戊辰瓦壞の以後に徳川の臣と稱して明治の代に時めく人は二三の人傑も、數十の紳士も殆んど皆な千石以下何百十俵の士分なれば、かの殿様には非ざる人々にして、元より幕府の樞機には關せし事なく、二三の知名の人さへも戊辰前四五年より政務に容喙せし位なれば、他は今日の奏任官程の役人或は海陸軍出身の人々なり、この人々は家系は三河以來の姓なれども、其血統は日本國中東西南北よ

(七七)



舊幕府 第一號

史

料



戊辰之夢

澤氏日記

伏見鳥羽戰爭後德川慶喜公江戸歸城の事

慶應四<sup>〇</sup>戊辰年正月三日、東軍の使者大目附瀧川播磨守、伏見鳥羽の關門を過んと番兵に乞ひしに、瀧川播磨守の使者を以て四ッ塚關門に行きしは京軍これを拒み遂に戰爭と成り、互に死傷多く勝敗決せず日暮に及び相引と成る、此夜京軍の襲來あり東軍大に敗北す、東軍の第一聯隊長窪田備前守、大隊長大澤顯一郎等其景狀を見て、奮然として率ゆる兵士を散兵に組みこれに當り、咄嗟衆を勵まして進撃す、京軍大に亂れ殆ど支へざらんとす、此時京軍の別隊東軍の左翼を目掛け頻りに銃撃す、東軍又破れて敗北す。翌四日には東軍大舉して伏見鳥羽兩道より進撃す、京軍は豫め鳥羽道の傍なる竹林中に伏兵を置き一手は本道に向ひ戰爭を始め、此とき東軍重なる將は

(一)

(二)

舊

幕

府

史

料

- 總督格 老中 松平豊前守 舊上總大多喜藩主今麴町區長なる大河内正賢なり
- 聯隊總長 若格 陸軍奉行 竹中丹後守 陸軍奉行 大久保主膳正
- 參謀 步兵奉行並 城和泉守
- 伏見鳥羽出軍の聯隊長及大隊長
  - 步兵奉行 高力主計頭 步兵奉行並 佐久間近江守
  - 步兵頭 窪田備前守 聯隊長四 步兵頭 横田五郎三郎
  - 軍監 木城安太郎 御目附 保田鉞太郎
  - 聯隊長一 步兵頭 徳山鋼太郎
- 其他差圖役等數人

東軍に於ては先づ銃を連發し、本道より勢ひ熾んに攻撃せしに、忽ち竹林中より數百の銃丸不意に打出し東軍の中央を衝く、又本道の京軍一時操引せしが取て返し、東軍の前隊を烈しく銃撃す、東軍の兵殞るゝもの數知れず、終に全軍散亂す。佐久間近江守は敗兵を纏め今一戰を爲さんと頻りに盡力せしも及ばず、茲に於て佐久間は家來澤田鉄太の所持する小銃を取り自ら伏勢の指揮官に向ひ狙撃せんとす、此時京軍には竹林中より隊長を目掛け連發す、其銃丸佐久間の全身に數發中り勇悍の將も重傷の爲に馬より落つ。此とき窪田備前守も一隊の兵士を勵まし奮戦せしが、亂軍の中に切り入りて打死す。

これは最終巻最終号の最終記事ですが、右の  
第一巻冒頭と共に奇しくも長州関係です

史談會記事

長州征伐に關して

野本次郎君

私は野本次郎と申しまして、男爵水野忠幹の舊臣で御座います……水野は紀州新宮の城主で紀州家の御附家老水野大炊頭の事で……只今立花様の御尋もありました、長州征伐に關しまして私の記憶致して居りますだけ申し上げませう、この戦争は二度目の長州征伐で、長州と申しますが其實は周防へも入りませんでした、藝州の中の戦争であります、四十八坂を越えますと玖波と申す處で、石州口はこゝから右へ入るので御座います、此の戦ひは先陣が井伊と榊原、中軍が紀州家です、軍事奉行は松平伯耆守です、井伊、榊原は御承知の如くに大敗軍でした、六月十四日に私どもは大野村に陣取り、十九日に開戦し、井伊は赤貝足の備で、新宮の勢は西洋風銃隊で、銃は「ミニユル」ゲベル、羅紗のマントル、ヅボンと申す服装でした、竹中丹後守は

(二十七)

史談會記事

第一巻 第一号

挿圖

- 003 徳川家康公画像並に親筆
- 007 小笠原老岐守肖像並に筆跡

史料

- 011 戊辰之夢(沢氏日記)

伏見鳥羽戦争後徳川慶喜公江戸帰城の事

- 030 南柯紀行①(大鳥圭介)

- 068 小笠原明山公御事蹟①(田辺松坡)

耳袋

- 078 旧幕監察の勤向(木村芥舟)

- 085 蓮翁往事談①(田辺蓮舟)

- 091 氷川茶話①(勝海舟) 三十俵が千石、二十回の襲撃他

- 094 榎本武揚子のおひたち(榎本武与)

- 097 腹鼓猶好物 幕末の政治的狂画 井伊遭難の頃の世相、

桜田の変、横浜の貿易商、物価騰貴他

- 101 諷刺片々 旧幕時代の時事漫言 酒価沸騰、当世流行

這世武士、道行卯月の浪人

詞藻

- 102 内宴賜觀能楽(木村芥舟、喘余吟録(本多晋)、唐

太小詩(栗本鯉)、栗本鋤雲先生を悼む(合川残花)

第一巻 第二号

挿圖

- 115 徳川三代將軍家光公親筆

- 117 大奥の五節句其一 (富岡永洗密画)

史料

- 119 彰義隊発起顛末(本多晋)

- 141 幕府軍艦開陽丸の終始①(沢太郎左衛門)

- 161 幕府名士小伝(木村芥舟)

越前守水野忠邦/備後守太田資始/中務太輔脇坂安董

/信濃守真田幸貫/大和守堀親宝/摂津守堀田正衡/

伊賀守新見正路/肥前守筒井政憲/図書頭成島司直/

左兵衛尉遠山景元/駿河守矢部定謙/甲斐守鳥居忠耀

/主計頭榊原忠義/大学頭林麴/近江守岡本成/佐渡

守久須美祐明/羽倉用九外記/伊勢守阿部正弘/備中

このような目次が四十頁もあります